

## まえがき

小学生の頃、読書感想文が大嫌いでした。なんであんなものを書かされなきゃいけないのか、僕にはさっぱりその意味がわかりませんでした。

読書自体は大好きでした。小学校に入学した時は、そこに図書室という施設があることを知って歓喜したものです。親からはぜひぶんたくさんの本を買い与えてもらっていましたが、当然それは全て読み尽くしており、特にお気に入りの本は何度も繰り返し読んだ結果、比喻ではなく文字通り擦り切れていました。だから、無尽蔵とも言える本が読み放題の図書室は、僕にとって夢のような場所だったのです。

図書室に入り浸れる時間は、面白そうな本を片っ端から読みました。しかし本を借りる場合は、面白そうかどうかは決して最優先事項ではありませんでした。なぜなら本を借りるのは一週間に一冊までという決まりがあったので、その時の僕にはなるべく分厚く活字

が細かいことが大事だったからです。とにかく、なかなか読み終わらない本を選ぶことが重要でした。

それはもはや本好きと言うより「活字中毒」とでも言うべきものだったのかもしれないが、何にせよ、本は読んでいるその間だけが重要でした。僕は束の間、現実を離れて本の世界を旅します。そして、そこから戻ってきたらまた次に旅する世界を図書室で探します。その世界は、その世界だけで完結していたのです。だから読書感想文などというものは、僕にとっては蛇足、無駄、いやむしろその世界に対する冒瀆ぼうとくと言ってもいいものでした。

そんな小学生時代の僕は、ちっとも気の乗らない読書感想文を何とか体裁だけでも整えるために、それを機械的にこなすためのスタイルを完成させました。それは、とりあえず全体をあらすじにまとめ、その一段落ごとに何かしらコメントを一言付け加え、最後を大人が喜びそうな優等生的感想で締める、というものでした。仮に『桃太郎』ならこんな感じ。さすがに小学生でも桃太郎が課題図書になることはなかったでしょうけど。

桃太郎はおじいさんがひろってきた桃から生まれました。ほくは人間が桃から生まれることがあるのかとびっくりしました。

桃太郎はわるいおにをたいじするためたび立ちますが、そのときおばあさんにきびだんごをもたされました。ほくもきびだんごというものを食べてみたいと思いました。

〈中略〉

ほくも桃太郎のように、正しいことのためにはいつでもゆう気をもって立ち向かっていきたいと思います。

人は成長するものです。大人になった僕はいつしか、本の中の世界が本の中だけでは完結しなくなっていることに気が付きました。読書そのものが、単にその世界の傍観者として、そこに書かれたことを受け止めて吸収するだけのことでなくなっただけのことです。

桃太郎であれば、その時代におけるきび団子という食べ物、食文化における位置付けや

携行食としての保存性に思いを馳せ、桃太郎が実はただの独善的なテロリストでしかなかった可能性を疑ったりするようになったということです。犬や猿はまだしもキジまでもが戦闘に参加したのは、単なる同調圧力だったのではないかと、とか。

それは、言うなれば作者との対話とも言えます。共感、疑問、反論、発展、そういった様々なテーマが、作者の描き出す世界と自分のこれまでの人生が邂逅かいこうする中から生まれてくるのです。本書は、そういった心の中の対話を一つひとつ記した、言うなれば子供時代の読書感想文へのリベンジのようなものです。

そもそも、本の世界と相對するような人生などまだほとんど背負っていない子供にとつて、読書感想文というのはあまりにも荷が重いかもかもしれません。そこには、読書というミッションを宿題としてこなした証拠の提出、というくらいの意味しかなかったのではないのでしょうか。僕は子供時代の自分に対して、どうだ大人になったらこんな感想文が書けるようになるんだぞ、と自慢したい気持ちです。だから今、つまらない感想文しか書けなくても仕方ない。そんなことは気にせず今の調子でどんどん本を読め、と言ってやりたい。

この本は、いわゆる「書評」ではありません。純然たる読書感想文、すなわち作者との妄想対話集ということにもなりません。そして読書の中でも、食べ物にまつわるものにテーマを絞っています。食べ物というのはいたい何かしらの共通体験があるものですから、作者の世界と自分の人生は度々邂逅します。そこで生まれた様々な想いを素直に綴ったのがこの本です。

取り上げた本は、若き日に背伸びして手に取った本から、同時代を生きる今の作家さんのものまで様々です。幸いなことに最近では、そんな作家さんたちと直接お会いする機会も増えました。しかし不思議なもので、本を読んでいる間の心の中ではあれだけ雄弁だった僕も、本人を前にすると照れくさくって何も言えなくなってしまう。対談のような場であつたら、いつまでも黙っているわけにもいかないのですが、そういう時はなんとなく微妙に核心を避けた話題に終始しがちです。もしくは意を決して早口でひたすら一方的に感想を捲し立て、話し終わるとすっかり恥ずかしくなって、相手の目も見られずに下を向いてモジモジしてしまうか……。

そんな不甲斐ない僕ですが、もしかしたらそれは対談相手の作家さんも「お互い様」な

のかもしれませんが。それが読書というものなのでしょう。本の読み方は少しずつ変わってきたかもしれないけど、一つの世界に没頭してそれを味わい尽くす、という意味では、結局何も変わっていないのかもしれませんが。この本をきっかけに、読者の皆さんがそんな新しい世界をまた一つ発見できることになれば幸いですし、この本そのものとの妄想対話も楽しんでいただければ、僕も著者冥利みょうりに尽きるといえるものです。